



この街が好きだから

武蔵野スケッチ物語

絵と文
大須賀一雄

93

見慣れた風景も、絵になるとちょっと違う趣が出てきます。

そんな武蔵野の風景を、大須賀一雄さんが春夏秋冬で切り取って描きます。

境四丁目にて

かつて英語を学んでいた時のこと。つくづく感じたことだが、日本語は表意文字なので一字一句に意味があり、本当に素晴らしいと思ったことがあった。それ故、俳句や川柳などの文学が生まれ、とても良かったと思っている。

個人的には、俳句よりも川柳の方に関心があり、時々自分でも句を作って楽しんでいる。かつて「橋の下 上目遣いの 鯉ばかり」が句会で入選し、賞品として自作の絵のテレホンカードが送られてきたことがあった。それは、私にとっては特別なことだったので、今でもそのカードを大切に保管している。

その後も、何回かチャレンジしたが、思ったような作品ができず、思い悩んでいる昨今である。いつかまた、これといった川柳ができれば、本稿で紹介させていただければと思っている。

大須賀一雄（おおすか・かずお） 水彩画家。1937年群馬県出身。武蔵野市在住。画材は透明水彩。元JR東日本国際課勤務。JR東日本絵画クラブ初代事務局長。これまでJR東日本の駅の絵を1000点以上描き、新聞、雑誌、テレビなどでも紹介されている。著書は『あなたの街の駅物語』（日貿出版社）、『スケッチお手本帖』（素朴社）、『透明水彩の世界・ヨーロッパ』および『緑』（旅もようスケッチ会）ほか。2022年まで、JR東日本の大人の休日倶楽部のカレンダーの絵を担当。海外スケッチ旅行歴も長く、これまで50カ国以上を訪れ、個展も30回を超える。